



**Data**

監督・脚本：三浦大輔  
 原作：石田衣良『娼年』（集英社文庫刊）  
 出演：松坂桃李／真飛聖／冨手麻妙  
 ／猪塚健太／桜井ユキ／小柳友／馬淵英里何／荻野友里／佐々木心音／大谷麻衣  
 ／階戸瑠李／西岡徳馬／江波杏子

### ■■ショートコメント■■

◆三浦大輔監督の『愛の渦』（13年）（『シネマ 32』未掲載）はかなりエロティックかつセンセーショナルな映画だったが、同監督が石田衣良の原作『娼年』の舞台化に続いて、さらに映画化した本作もかなりエロティックで刺激的。キネマ旬報4月下旬号では冒頭にその特集が生まれ「松坂桃李、聖域を超える」との見出しでその全貌が語られている。

舞台が「R15指定」なら、映画も「R18+指定」。冒頭から20才の大学生森中領に扮した松坂桃李がスッ裸になってのセックスシーンが展開されるが、これこそが「セックスが会話になる」をうたい文句とした本作の特徴。意外にも客席は女性陣が8割以上。これはほとんどみんな松坂桃李目当て・・・？

◆「娼婦」は昔からある立派な職業（？）だが、何でもありの今の時代、「娼夫」だって当然OK。もっとも、娼夫がれっきとした男の職業なのか、それともホストクラブのホストの延長に過ぎないのかはイマイチ本作を観てもはっきりしないが、今風の問題提起であることはよくわかる。

それを男性作家の石田衣良が『娼年』で表現したことに驚きだが、本作では娼夫となる男の心理のみならず、その客となるさまざまな階層、年齢、種類の女たちの性的欲望とその心理が分析され描かれていることにビックリ。

◆もっとも、エイズの女、口のきけない女という2人の主人公をはじめ、〇〇の女、△△の女、××の女等、ある意味で変態的な性的欲望を見せつける女たちが次々と登場し、リョウ君は1人1人そのお相手をしなければならぬのだから娼夫も大変。ちなみに、70歳のばあさんにも性欲はあるらしいが、女渡世人や女バクチ師として一世を風靡した女

優・江波杏子がそんな役をやっていると、痛々しく思えたのは私だけ・・・？また、これだけの仕事をする娼夫の時給1万円が高いのか安いのかは微妙なところだ。

◆一流大学の経済学部に入ったものの、勉強にもバイトにも女にも興味を持たず、ヒマを持って余っていた領が、会員制ボーイズクラブ「Le Club Passion」のママである御堂静香（真飛聖）から見い出され、娼夫として成長していくというのが本作のメインストーリー。それは、ある意味で『スパイゲーム』（01年）（『シネマ1』23頁参照）におけるロバート・レッドフォードとブラッド・ピットの関係と同じだが、その社会的役割の大きさは全く違う。

同作のCIAのスパイとしてさまざまな危険な任務に従事しながら成長していくストーリーには一種の爽快感があったが、さて本作は・・・？ちなみにヘンリー・フィールドイングの小説を映画にした『トム・ジョーンズの華麗な冒険』（63年）は主人公トムの女遍歴の物語だったが、さて人間としての成長は、トム・ジョーンズとリョウ君のどちらが上・・・？

◆領の性的魅力には全然興味がないように思えた同級生の女の子、白崎恵（桜井ユキ）が1ヶ月分のバイト代に相当する大枚をはたいて「娼夫」の領を買うラスト近くの物語にはかなり違和感があるが、全体としての問題提起はなかなかのもの。そして、何より松坂桃李の文字通りスッ裸になっての熱演の連続には頭が下がる。AV女優は大変だが、実はそれ以上に大変なのはそのお相手をするAV男優だ。本作のような文学作品、芸術作品（？）を見ているとそれがより一層わかってくる。

松坂桃李は本作の直後には役所浩司と組んだ『孤狼の血』（18年）の公開が控えているので、そこでの男らしいヤクザの演技（？）と対比しながら、本作で彼の20代最後となる裸の熱演をしっかりと確認したい。

2018（平成30）年4月14日記



**Data**

監督・脚本：鶴橋康夫  
 原作：小松重男『蚤とり侍』（光文社文庫刊）  
 出演：阿部寛／寺島しのぶ／豊川悦司／斎藤工／風間杜夫／大竹しのぶ／前田敦子／松重豊／桂文枝

■□■ショートコメント■□■

◆『後妻業の女』（16年）における「後妻業」ならまだわかるが、江戸時代に実在したという「蚤とり侍」とは一体ナニ？鶴橋康夫監督が歴史小説の第一人者・小松重男の傑作短編集『蚤とり侍』の中の人気エピソードを元に自ら脚本を書き監督をした本作は、時代劇漫画の醍醐味でいっぱい。

主役の小林寛之進を演ずる阿部寛のナレーションを多用するのは如何なものだが、わかりやすさという意味ではTVドラマと同じで、それなりの楽しさが・・・。

◆本作導入部では、①越後長岡藩のパカ藩主（？）、牧野備前守忠精（松重豊）から「蚤とり侍になって無様に暮らせ！」と宣告され、藩から追放された寛之進が、②“のみとり”屋の親分、甚兵衛（風間杜夫）とその妻で女将のお鈴（大竹しのぶ）から暖かく迎えられ、③貧乏長屋で貧しい子供たちに無償で読み書きを教える寺子屋の先生、佐伯友之介（斎藤工）らと共に新たな生活に入っていく風景が、ユーモアたっぷりに描かれる。

時は、十代将軍・徳川家治の時代。時の権力者、田沼意次（桂文枝）は今の日銀総裁・黒田東彦氏と同じような「金融緩和策」をとり、世の中にカネがジャブジャブ回る政策をひた進めたが、そのことの是非は・・・？そして、それによる、“富める層”と“貧しき層”の二分化は・・・？

◆まあ、そんな難しい話はさておき、ストーリーが急展開するのは、④寛之進にとって初の“のみとり”客となる亡き妻・千鶴に瓜二つの女・おみね（寺島しのぶ）から「下手クソ」と罵倒されたこと、⑤恐妻おちえ（前田敦子）のとんでもない“浮気防止策”に苦勞しながらも、寛之進に“のみとり”の指南を授ける良き友人、清兵衛（豊川悦司）との交

流が始まること。これによって⑥以降、寛之進がメキメキ“のみとり業”で頭角を現してくるサマに注目だが、⑦ “のみとり”稼業を職業として許可していた時の権力者、田沼意次が失脚してしまい、“のみとり業”が違法として取り締まりを受けることになる・・・。

◆本作のチラシを飾る阿部寛の写真は、手塚治虫が写楽をパロディで描いた『猫・写楽』を元に創造した蚤とり侍のイメージで、その隣には「貴女のみ、愛しています。」との文字が。3月12日に見た『娼年』（18年）は、松坂桃李の文字通り“裸の熱演”で現代版の「娼夫」の奮闘と成長を描いたリアルな物語だった。それに対して、同じ女性に対する性的サービス業であっても、本作はあくまで漫画的かつ風刺的だから、その対比をしっかりと。

もっとも、本作は田沼意次役を演ずる桂文枝師匠のセリフが聞き取りにくいのが少し難点。芸達者な俳優陣をこれだけ揃え、その全員にユーモアたっぷりの演技をさせるのなら、せめて田沼意次役だけは文枝師匠ではなく、本物の「堅物俳優」を据えてもよかったのでは・・・。

2018（平成30）年4月20日記

# SHOW HEY シネマールム

★★★

## 妻よ薔薇のように 家族はつらいよⅢ

2018年5月25日/日本映画  
配給：松竹株式会社/123分

2018 (平成30) 年4月25日鑑賞

松竹試写室

### Data

原作・監督・脚本：山田洋次

出演：橋爪功/吉行和子/西村まさ

彦/夏川結衣/中嶋朋子/

林家正蔵/妻夫木聡/蒼井

優/小林稔侍/風吹ジュン

/笹野高史/木場勝己/藤

山扇治郎/徳永ゆうき/笑

福亭鶴瓶

### ■ショートコメント■

◆第1作のテーマを「熟年離婚」、第2作のテーマを「無縁社会」とした山田洋次監督の『家族はつらいよ』シリーズ第3作のテーマは「主婦への賛歌」。そのため『妻よ薔薇のように』をメインタイトルにしたが、第3作のテーマのより具体的展開は、妻の「家出」になる。今ドキ三世代6名が1つの家で暮らす家族は珍しいが、あるきっかけでそのド真ん中に座っていた主婦、平田史枝(夏川結衣)が家出してしまったら・・・？

「69+1」歳問題を抱えている男の私には少し女性目線に片寄りすぎの感がしないでもないが、チラシに書いてあるとおり、本作は「全てのダメ夫を持つ女性が笑って共感、しみじみ泣けて励まされる。山田洋次監督が贈る、家族のラブストーリー」だ。

◆本作は山田洋次が演出(監督)だけでなく、原作、脚本も書いたそうだから、まずはそのエネルギーに脱帽。しかし、あまりにも定番通り、予想通りのセリフとストーリー展開は「予定調和」があまりにも目立ってしまう。もちろん、それは本シリーズの前提としてオーケーなのだが、これをわざわざ映画で？という疑問が、ついチラホラと……。つまり、このレベルの「ホームドラマ」を楽しむのなら、わざわざ映画館に行かなくても自宅ですぐに食事しながら、新聞を読みながらで十分なのでは……。？ということだ。

1931年から長期にわたって人生経験を重ねてきた山田洋次監督ならではの「まとめ能力」には感心させられるものの、1つ1つのセリフやエピソードの展開はTVのホームドラマと同じレベル……。ここ2週間にわたってBS放送で『ロッキー』シリーズを鑑賞してきた私は、『ロッキー』シリーズは映画館で見るべき映画だという確信があるのに対し、本作はTVで十分だと思ってしまったが……。

2018 (平成30年) 年5月1日記



**Data**

監督: 平柳敦子

脚本: 平柳敦子/ポリス・フルートン

出演: 寺島しのぶ/南果歩/忽那汐里/役所広司/ジョシュ・ハートネット

### ■■■ショートコメント■■■

◆ニューヨーク大学大学院在学中に製作した短編が高く評価され一躍スポットライトを浴びた平柳敦子監督が、短編を長編化した本作では、ハリウッドコメディ界を牽引する豪華映画人も参加。カンヌ国際映画祭批評家週間に日本人監督としては10年ぶりに選出される快挙も達成した。そう聞くと本作は必見! そう思ったが・・・。

◆私には、43歳で独身、職場では空気のような存在という女・節子(寺島しのぶ)の孤独感はわからないし、そもそも関心がない。したがって、節子の更なる先輩が定年で退職する日のドタバタ劇(茶番劇)も、なるほどと思うだけだ。

それと同じように、節子の姉・綾子(南果歩)がとことん困り果てているワガママで自由奔放な一人娘・美花(忽那汐里)から誘われて英会話教室の体験コースに行った節子のその後の変化についても私はあまりわからないし、へえーと思うだけだ。ハグの大好きな教師ジョン(ジョシュ・ハートネット)からルーシーという英語の名前を付けられ、頭に金髪のかつらを被せられただけで、43歳の独身女がホントにあんなに変わっていくの・・・?

◆この英会話教室は何となくヘン。43歳の用心深い独身女なら当然そう思うはずだが、なぜ節子は大金を払ってまで、そこに通うことになったの? また、その勧誘が美花とジョンの狂言であり、美花とジョンは今アメリカのカリフォルニアにトンズらしてしまったことがわかった後、なぜ節子は大枚をはたいて美花に会いに行くというストーリーになるの? さらに、節子からそれを聞いた綾子まで、なぜ一緒にカリフォルニアまで娘探しの旅に出かけていくことになるの? そこらあたりのストーリーの構成はちょっと杜撰すぎるのでは・・・?

◆43歳の独身女・節子が、その性的欲求を如何に処理しているのかは知る由もないが、本作で節子がジョンに対して見せる「迫り方」は少し異常。ジョンにとっては若い美花の方がいいに決まっているし、本来、彼には妻子もいるのだから、節子のような特に魅力もないおばさんから迫られても・・・？しかも、カリフォルニアでは自分と同じ刺青まで掘られても、そりゃ困るばかりだ。更に、このおばさんがちょっと異常だと思うのは、「もし、私とジョンが寝たとしたら・・・」と、美花にしゃべること。それにショックを受けた美花のその後の行動も異常だが、このおばさん、ちょっと頭おかしいのでは・・・？私にはそうとしか思えなかったが・・・。

◆役所広司は『Shall We Dance?』（96年）では社交ダンスの教室に通い、それにのめり込む中で新たな人生に目覚めるというすばらしい役を演じていた。また5月12日から公開される『孤狼の血』（18年）では、「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」の名セリフが今から楽しみだ。しかし、ルーシーと同じようにかつらを被り、英語名を名乗る本作での小森の役はイマイチ。小森が教室内ではじめて出会った節子に好意を持っていることは明らかだが、それは一体なぜ？1度や2度英会話教室で一緒に勉強しただけの縁で、節子の家まで訪ねていくことなんてことがホントにありうるの？

孤独な中年男が孤独な中年女に一目で惹かれたという筋書きはわからないでもないが、そんな本作の構成も少し安易すぎるのでは・・・？

2018（平成30）年5月10日記



**Data**

監督：本木克英  
 原作：池井戸潤『空飛ぶタイヤ』（講談社文庫／実業之日本社文庫）  
 脚本：林民夫  
 出演：長瀬智也／ディーン・フジオカ／高橋一生／深田恭子／寺脇康文／小池栄子／阿部顕嵐／ムロツヨシ／中村蒼  
 笹野高史／岸辺一徳／柄本明／佐々木蔵之介／六角精児／大倉孝二／津田寛治

## 👁️👁️ みどころ

池井戸潤の原作がはじめて映画化！そのネタは！「三菱自動車リコール隠し事件」だが、「半沢直樹」と同じように今ドキホントに大企業内の若手社員による内部反乱がありうるの？

わかりやすい展開はテレビドラマとしては上出来だが、映画としての問題提起性や芸術性は如何に？その点が、私にはイマイチだが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■池井戸潤の原作がはじめて映画化！■□■

『空飛ぶタイヤ』とは何ともショッキングなタイトルだが、これは近時『半沢直樹』や『民王』等が次々とテレビドラマ化されてきた、人気作家池井戸潤の人気小説。同作も2009年にWOWWOWでテレビドラマ化されたが、意外にも池井戸潤小説の映画化は本作がはじめてらしい。

「半沢直樹」を面白くテレビドラマで鑑賞した私が思うに、それは、池井戸潤の小説はテレビドラマとしては面白いが、映画化にはあまり適していないため・・・？本作を観て、正直そんな感想をさらに強くすることに・・・。本作の監督は本木克英だが、多分彼もテレビドラマの演出には向いていても、映画監督にはあまり向いていないのでは・・・？本作を観て、その感も強くしたが・・・。

### ■□■原因は整備不良？構造上の欠陥では！■□■

赤松運送の運転手がトレーラーを運転中、その左前タイヤが突然はずれ、これが左前方の歩道を歩いていた母子連れの母親を直撃。母親は即死したが、これは車両の整備不良に



よるもの。警察もトレーラーの製造元であるホープ自動車もそう結論づけたため、赤松運送は窮地に。しかし、若き社長・赤松徳郎（長瀬智也）が調べたところでは車両の整備に不十分な点はなかったから、ひょっとしてこれは整備不良ではなく、車両の構造上の欠陥によるもの・・・？

そんな疑惑を深めた彼はその解明のための努力を続けたが、ホープ自動車のカスタマー戦略課課長の沢田悠太（ディーン・フジオカ）がそれを全く取り合ってくれなかったのは当然だ。そもそも一介の運送業者が、トヨタ、ニッサン、ホンダ、三菱自動車等の大手自動車メーカーが製造した車両に構造上の欠陥があるなどと文句をつけても、それが通用しないのは日本の常識。もちろん、それは赤松にもわかっているのだが・・・。

## ■□■メーカーや銀行の若手社員が内部反乱を？■□■

そんな赤松運送側からのアプローチに対して、本作では、遅まきながら少しずつホープ自動車の内部体制に疑問を持ち始めた沢田や、ホープ自動車の経営の在り方に疑問を持ち始めた、メインバンクたるホープ銀行の本店営業本部の井崎一光（高橋一生）たちの「内部反乱」の様子が描かれていく。彼らこそ「半沢直樹」と同じような、大企業内のサラリーマンでありながら、勇気と行動力にあふれた一種理想的な人物像。そのため、今ドキの若者は彼らのそんな姿に惹かれるのだろう。

本作ではそこに、少し言葉づかいは悪いが人間味にあふれた情熱的な中小企業の若社長赤松がメインとして加わるから、池井戸潤の原作は若者たちの人気を集めたのだろう。他方、沢田や井崎たちの動きの起爆剤になるのが、週刊潮流記者の榎本優子（小池栄子）、悪役は岸部一徳演ずるホープ自動車の常務取締役・狩野威だ。また、本作ラストに決定的な変化をもたらすのは港北中央署刑事の高幡真治（寺脇康文）たちだ。

なるほど、そんな組織構造と人物構造がわかりやすいから、池井戸潤の原作は2時間のテレビドラマに収めるにはちょうどいいネタかもしれない。本作を観ていると、その展開がよくわかる。しかし、それって映画なの？また芸術なの？

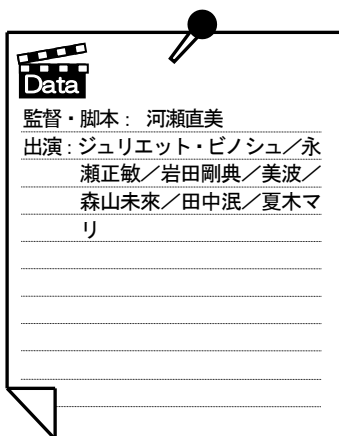
## ■□■三菱自動車リコール隠し事件の重さは？その教訓は？■□■

三菱自動車による「三菱リコール隠し事件」とは、1977年から約23年間にわたって10車種以上、乗用車系で6件約45万9000台、大型・中型トラックで3件約5万5000台、計18件約69万台にのぼるリコールにつながる重要不具合情報（クレーム）を、運輸省（現・国土交通省）へ報告せず、社内で隠匿しているもの。これは、2000年6月に三菱自動車社員による匿名の内部告発による通報で発覚した。ここから、現在大流行の「コンプライアンス」という言葉が生まれたわけだが、そもそも自動車のリコールとは一体ナニ？なぜそんなことが起きるの？その防止策は？三菱自動車以外の事例は？

私は弁護士としてそれを一生懸命勉強してきたが、本作のような形でリコール問題が薄

っぺらな人間ドラマ、社会ドラマ化されることが少し心配だ。「空飛ぶタイヤ」の原因が大手自動車メーカーが製造したトラックの構造上の欠陥にあることを、一民間企業がどうやって立証し、どうやって告発することができるの？問題の本質は何よりもその難しさにある。しかして、本作はそれを大きなテーマにしているものの、私にはどう見ても2時間のドラマに収めるためのストーリー構成のテクニックが先だっているような感じに・・・。  
ちなみに、本作のプレスシートには「三菱リコール隠し事件」をネタにしていることは一切触れられていないが、これはひょっとして日本の大手自動車メーカーの意思を「忖度」したため・・・？

2018（平成30）年5月10日記



## ■■■ショートコメント■■■

◆カンヌ国際映画祭を中心にした活動と活躍が目立つ河瀬直美監督は奈良県出身で、「なら国際映画祭」を主宰している。その地域密着型、世界発信型を特徴とする独自のスタイルは目を見張るものがあるが、河瀬作品の好き嫌いはハッキリ分かれており、私はどちらかという嫌い。それは、彼女のデビュー作でカンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を受賞した『萌の朱雀』（97年）をテレビで観た時からだ。私の評価としては、まさに「カッコつけ」「評判倒れ」という言葉がぴったりだった。

奈良を活動の舞台とする彼女だが、実は本来の自分のルーツが奄美大島にあることを知った河瀬監督はその後、『2つ目の窓』（14年）を監督したが、これはまずまずだった（『シネマ33』76頁）。しかし、河瀬作品があまり好きでない私は、その後の『あん』（15年）や『光』（17年）を観ていない。しかし、最新作の『Vision』は試写の案内をもらったため、試写室へ。

◆河瀬作品はタイトルも内容も抽象的だが、それは本作も同じ。永瀬正敏は河瀬作品の常連だが、フランス人女優・ジュリエット・ピノシュは世界的ビッグネーム。そんな世界的大女優とカンヌの映画祭で一緒になり、話をしている中で次の企画を相談し、それを実現させるところが河瀬流。彼女が参加する映画化の話をホンモノにするのだからすごいものだ。

もちろん、本作も河瀬監督のオリジナル脚本に基づくもので、当然ジュリエット・ピノシュ扮するジャンヌは日本へやってくる観光客という設定だが、その目的は「葉狩り」とのこと。しかし「葉狩り」って一体ナニ？本作のタイトルは「Vision」だが、その意味も含めて、分かったような分からないような、クソ難しい哲学的な設定がいかにも河瀬流だ。また、そこに絡む、夏木マリ扮する老女・アキの存在感がこれまたすごい。彼女が語る「1000年に1度の時が迫っている」との予言めいた言葉はどこか不気味だが、それが本作のもう一つのテーマである吉野の森（の自然）の美しさと相まって、本作を独特の河瀬流世界観

に観客を惹き込んでゆくので、それに注目！

◆吉野の山深い森の中で、猟犬のコウと共に1人で生活している48歳の男・智（永瀬正敏）が、何の抵抗もなくフランス人女性ジャンヌと英語で会話できる不自然さは横においても、いきなり智とジャンヌがラブシーンに入ったことにはビックリ！こりゃ一体なぜ・・・？

また、本作後半には、智が山の中から救い出した謎の青年・鈴（岩田剛典）が登場することによって、さらに不思議さが増していく。智が鈴に昼間の林業の仕事を手伝わせたのはいかなもの（？）だが、それはさておき、後半ではさらにジャンヌと鈴とのラブシーンも登場するので、アレレ・・・？いやいや、これはラブシーンと言ってはダメなのかも知れないのかも・・・？

◆本作は冒頭、猟師の源（田中泯）が森の中で鉄砲の音を響かせるシーンからスタートするが、彼の表情を見ると、何かを誤って撃ってしまったことが明らかだ。そんな冒頭の疑問点は本作ラストで明かされる（？）ので、それに注目！もっとも、そこではさらに猟師の岳（森山未來）も登場してくるので、人間関係はややこしい。これらの男たちとジャンヌは一体どのように絡まっているの・・・？そんな展開の中に本作のタイトルである「Vision」の意味が含まれているそうだから、それはあなた自身の目でしっかりと。もっとも、私にはサッパリわからなかったが・・・。

森山未來が自分の名前に「未來」とつけるのは自由だが、「Vision」を「未来」と置き換え、本作の中で智が見い出す「Vision（未来）」を、私たちに共に見つけさせようとするのは、ちょっと横暴なのでは？私はそうした河瀬流のやり方が、あまり気に入らないのだが・・・。

2018（平成30）年5月14日記



**Data**

監督・脚本：深田晃司  
 出演：ディーン・フジオカ／太賀／  
 阿部純子／鶴田真由／アディパティ・ドルケン／セカール・サリ

### ■■■ショートコメント■■■

◆『歓待』（10年）（『シネマ 27』160頁）でその才能を世界に見せつけた深田晃司監督は、その後も『ほとりの朔子』（13年）（『シネマ 32』115頁）、『淵に立つ』（16年）（『シネマ 38』79頁）等の素晴らしい映画を次々と世に送り出してきた。しかし、私には『さようなら』（15年）（『シネマ 37』未掲載）がイマイチだったように、本作もイマイチ……。

本作で正体不明の謎の男「ラウ」を演じるのは、男前ぶりで人気沸騰中の俳優、ディーン・フジオカだが、イエス・キリストのような奇跡を次々と起こしながら、最初から最後まで正体不明のミステリアスな存在のままでは、そりゃ一体ナニ……？

◆2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震の津波によってインドネシアの街バンダ・アチェは壊滅的な被害を受けた。他方、2011年9月11日に日本で発生した東日本大震災を受けて同年末にアチェで開催された災害復興についてのシンポジウムに深田監督は記録係として同行し、はじめて出会ったアチェに大きく価値観を揺さぶられたようだ。

その中で私たちが生きる世界のマイクロからマクロまでの条理と不条理の縮図を見出した彼は、「インドネシアと日本の若者たちが出会えば何が起きるのだろうか。それを撮りたい。」と考え、そんな妄想から本作を作ることに……。

◆インドネシアは私たち日本人にとって短期の旅行で行くことはあっても、仕事上で定住することはあまりない国。しかし本作では、私の大好きな女優、鶴田真由が現地で災害復興支援の仕事をしている日本人女性・貴子役としてストーリー進行上のキーウーマンになっている。

その貴子の息子がタカシ（太賀）。そして、タカシの従妹がサチコ（阿部純子）。また、タカシの同級生がクリス（アディパティ・ドルケン）で、同級生のクリスの幼馴染がイルマ（セカール・サリ）だ。

◆本作のチラシには次の解説がある。すなわち、

人生は不条理 だから愛おしい・・・

ある日、海岸で倒れている男が発見された——

片言の日本語やインドネシア語を話す以外は正体不明

「ラウ」（＝インドネシア語で「海」と周りから名付けられたその男の周辺で、奇妙な出来事が次々と起こり始める

果たして「ラウ」とはいったい何者なのか・・・

また、本作のイントロダクションには「全ての生命を産み出す『海』 全ての命を奪う『海』 彼は『海』から現れた——」と、貴子が正体不明の男を「ラウ（海）」と名付けたことの深淵な意味（？）が短い言葉で解説されている。

◆それはそれでわかるのだが、現実にはスクリーン上で展開されるのはタカシとサチコ、そしてクリス、イルマたち若者のさまざまな「活動」だから、その中でラウが少しずつ見せていくイエス・キリストのような「奇跡」との繋がりがイマイチ不明……。そのため、私の本作の評価は星3つに……。

2018（平成30）年6月6日記



**Data**

監督、脚本：沖田修一  
 製作：新井重人、川城和実、片岡尚  
 出演：山崎努、樹木希林、加瀬亮、  
 吉村界人、光石研、青木崇高、  
 吹越満、池谷のぶえ、きたろ  
 う、林与一、三上博史

### ■■■ショートコメント■■■

◆タイトルを見ても何の映画かサッパリわからないし、97歳まで生きた画家・熊谷守一の94歳当時の仙人のような生きザマを描いた映画と聞いても、そのイメージはサッパリ湧いてこない。しかし、チラシの写真を見て予告編を観れば、そのイメージがたちまち一発で！

◆公式サイトによると、熊谷守一の魅力は次の通りだ。

熊谷守一は、1880年生まれ。早くから才能を認められながらも、絵を褒められようとも有名になろうとも思わず。絵で家族を養えるようになったのは50歳を過ぎたころ。42歳のとき、秀子（24歳）と結婚。1932年、豊島区に自宅を新築し、1977年亡くなるまでこの家で暮らした。いま熊谷守一が注目されるのは、その常識にとらわれない生き方、清貧にして豊かな人生が現代人を魅了するだろう。この並外れた個性を持つ夫を深く理解して人生をともに歩んだ妻との夫婦のあり方もまた、私たちが魅了してやまない。芯の通った生き方とチャーミングな人柄、枯れることのない好奇心とともに生涯現役として過ごしたしなやかな強靱さ、草木が茂った生命力あふれる庭に、豊かな人生とはどんなものであるかを教えられる。本作は、熊谷守一という人と芸術のエッセンスを見事に凝縮させた映画なのだ。

◆さらに本作のチラシには、次の紹介がある。すなわち、

名優・山崎努と樹木希林 円熟の夫婦を味わい深く 人生が愛おしくなる珠玉の物語  
 山崎努演じる画家モリ（熊谷守一）は94歳。猫、蟻、揚羽蝶、鬼百合・・・毎日、庭のちいさな生命たちを飽くことなく眺め、絵を描いてきました。50歳を過ぎてようやく認められ、近頃はどうか暮らせるようにはなつたけれど・・・相変わらず周囲の期待通りには筆が進みません。

樹木希林が演じる妻・秀子は76歳。時流にも無頓着な夫と世間の間に立ち、時に光と影を包み込み、毎夜アトリエに送り出します。この夫婦の52年間は、決して平坦ではありませんでした。子どもを亡くす経験もしました。二人は、じかに優しい言葉をかけあうことはしないけれども、ふと漏らす言葉に互いへの深い敬意と愛情がうかがえるのです。

山崎努と樹木希林-日本映画の至宝たる名優が演じる老夫婦の佇まいには、長い歳月を生きた深い絆が感じられます。ただ二人がいる。その姿だけで感動が心に広がるのです。

◆また、本作の物語は次の通りだ。

庭と生き物を愛し幸せに暮らす夫婦に、マンション建設の危機が忍び寄る。陽が差さなくなれば生き物たちは行き場を失う。慈しんできた大切な庭を守るため、モリと秀子、それぞれある行動にでる・・・

◆それにしても、30年間、ほとんど自宅と庭から外に出たことがないというモリの人生はすごい！本作は、彼が94歳つまり1974年当時の物語(?)だから、本作に登場するような東京の豊島区では、マンション建設に伴う土地の立ち退き問題はあっても、1980年代の強力かつ質質な地上げ問題はまだ発生していない。したがって、本作に登場するマンションオーナーの水島(吹越満)や工事現場監督の岩谷(青木崇高)との交渉は牧歌的で、それが本作にほど良い味付けを与えている。ある意味、モリは良い時代に97歳で死亡したといえるかもしれない。

そんな都市問題の視点からも、ラストに空からのカメラで映し出されるモリの一軒家の存在をしっかりと考えたい。

◆本作では、昭和天皇から「何歳の子どもが描いた絵ですか？」と尋ねられたモリの絵をたっぷり鑑賞することができないのは少し残念だが、それ以上に『モリのいる場所』というタイトル通り、これぞ唯一無二と思われるモリの生き方をしっかりと感じ取ることができる。また、本作では、樹木希林の円熟した演技が最大の魅力だが、同時にカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した是枝裕和監督の『万引き家族』(18年)で、一家の要となるおばあちゃん役を演じていた樹木希林が、本作ではモリから「あいつが居なくなったら一番困る。」と言われるほどの強い信頼関係で結ばれる妻・秀子役を淡々と好演しているので、それにも注目！

◆本作は、予想通りの内容で予想通りの出来。また、予想どおりの演技力と予想通りのユーモアでいっぱい。したがって、それなりの良作、佳作であることは間違いない。



しかし同時に、近時の邦画は若者向けの映画と本作の様な「老人向け」の映画（？）に完全に二分されていることを実感。

2018（平成30）年6月5日記



**Data**

監督・編集: スティーヴン・オカザキ

原案: 松田美智子「サムライ評伝三船敏郎」(文藝春秋刊)

脚本: スティーヴン・オカザキ/スチュアート・ガルブレイズ4世

ナレーター: AKIRA

出演: 三船史郎/香川京子/司葉子/黒澤久雄/スティーブン・スピルバーグ 等

### ■■■ショートコメント■■■

◆「日本映画史上最高の俳優は誰か。これは意見が分かれるところですが、私にとっての最高のヒーローは三船敏郎意外には考えられません。スクリーンに映し出されたミフネは、いつも格好良く、誰も予測ができぬ、唯一無二の存在でした。」これが本作を監督したスティーヴン・オカザキの意見だが、私もそれに同感。

私は『七人の侍』(54年)、『用心棒』(61年)をリアルタイムでは観ていないが、『隠し砦の三悪人』(58年)は、子供心に小学生時代に観た記憶がある。また、『赤ひげ』(65年)は、大学時代にほぼリアルタイムで観たし、東宝が「東宝8.15シリーズ」として毎年終戦記念日に向けて制作していた戦争大作である、『日本のいちばん長い日』(67年)、『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68年)、『日本海大海戦』(69年)も大学時代にリアルタイムで観ている。これらはその後テレビで放映されるたびに、何度も観ていた。

中学・高校時代は吉永小百合・浜田光男の青春映画を中心とする日活映画が多かったが、松竹、東映、大映、そして東宝の代表作もそのほとんどを観ている私にとって、三船敏郎は石原裕次郎や中村錦之助、勝新太郎以上の大俳優だった。そんな三船を取り上げた本作は必見!

◆軍隊時代、戦後の食うためのニューフェイスへの応募、黒澤明監督との出会い、そして俳優としての絶頂期。三船のサクセスストーリーは、まさに戦中、戦後、そして高度経済成長時代の日本をまっすぐに駆け抜けていく姿だが、本作からは酒を愛し、車を愛しながら、仕事にもとことん真剣に向かい合う三船の姿が浮かび上がる。しかし、全盛期がずっと続かないのが人の常だ。三船にも不遇期が訪れたが、彼はそれを克服し見事に復調。しかし、三船プロの危機や離婚の危機を迎え、最後は1997年にさびしく息を引き取った。

まずは、80分の本作でそんな三船の人生をたっぷり味わいたい。

◆私は小学生の時に、よく両親に連れられて東映のチャンバラ映画を観ていた。中村錦之

介、東千代之介、片岡千恵蔵たち、そしてそこには時々美空ひばりも加わっていた。しかし、本作はまず三船敏郎の「チャンバラもの」から入っていくが、チャンバラものは日本映画の最初でかつ大人気のジャンルだ。「目玉の松ちゃん」をはじめ、多くのチャンバラ映画スターが誕生したが、『七人の侍』と『用心棒』はそれまでのチャンバラ映画とは全く異質かつ異次元の作品だ。

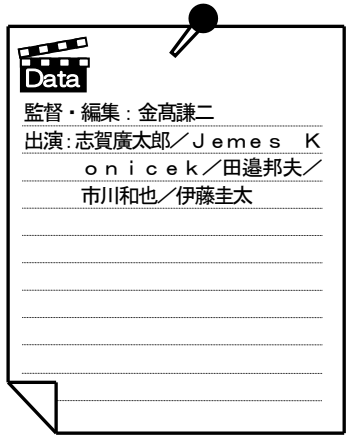
この両作は、米国のジョン・スタージェス監督の『荒野の七人』(60年)、イタリアのセルジオ・レオーネ監督の『荒野の用心棒』(64年)の原型にされるほど、世界的に影響を与えた。そこから始まった三船の、とりわけ黒澤明とのコンビによる作品は素晴らしいものばかりだった。また、黒澤明監督以外の稲垣浩監督とコンビを組んだ『無法松の一生』(58年)や『宮本武蔵』(64年)も素晴らしかったし、大学卒業後に観た、アラン・ドロンの、チャールズ・ブロンソンと共演した『レッド・サン』(71年)も三船の国際スターぶりがすっかり板についたエンタメ作品になっていた。

タイトルを『THE LAST SAMURAI』とした本作では、彼の多くの出演作から、まさに「ラスト・サムライ」としての俳優・三船敏郎をしっかり味わいたい。

◆本作は、三船の葬儀で黒澤明が三船に捧げた弔辞を、香川京子が朗読するシーンで終わる。そのセリフは「僕たちは共に日本の映画の黄金時代を作ってきたのです」というもの。まさに、そのとおりだ。折しも、第71回カンヌ国際映画祭で、是枝裕和監督の『万引き家族』がパルムドール賞(最高賞)を受賞したことによって、日本映画が今、世界から注目されている。

しかし、昨今の日本の映画界の状況、そして政治、経済、文化、外交、軍事を巡る日本の状況を見ると、再び日本の映画の黄金期を作るのはちょっと難しいかも・・・。

2018(平成30)年6月14日記



## ■ショートコメント■

◆第二次世界大戦の舞台ウラ。そこでは戦争回避に向けた近衛文麿首相の涙ぐましい努力や、真珠湾攻撃前の宣戦布告にこだわった山本五十六連合艦隊司令長官の姿等が知られているが、本作で私がはじめて知ったのが、「ウォーナー・リスト」。これは、米国人美術家のラングドン・ウォーナーが作成した、日本において空爆すべきでない151ヶ所のリストのことだ。

◆勝・西郷会談によって江戸城の無血開城を実現させて、江戸の街を戦火から救ったのと同じように、『パリよ、永遠に』（14年）『シネマ35』273頁）は、ドリンク VS コルティッツ会談によって今日の美しい都パリが残ったことを教えてくれた。しかして、本作が描く「ウォーナー・リスト」は、アメリカの日本空襲において、いかなる役割を？

◆皇居や御所はもちろん、京都や奈良の街は戦災を免れたと言われているが、その真意は？ また、その根拠は？ 他方、本作を観て私ははじめて東京神田神保町の古本屋街が空襲を免れた理由を知ることができたが、なるほど、なるほど……。しかし、原爆投下の目標を巡って京都が外されたのはいいが、その代わりに（？）広島が選ばれたことを考えると、日本人なら誰でもいささか複雑な気持ちに……。

◆本作を観れば、「ウォーナー・リスト」や、米国人美術研究家のラングドン・ウォーナーという人物が歴史的に果たした役割は明らかだが、ドキュメンタリー映画としての本作はまるで教科書のような感じで、映画としての娯楽性は薄い。これはコトの本質上やむをえないのかもしれないが、本作に登場する「神保町に残る戦争秘話」は興味深い。

したがって、私としてはこれをベースに物語風のエンタメ作品を作ってもらいたいもの

だ。この「秘話」をベースに登場人物を少し増やし、物語を少し膨らませて脚本を書けば、いいエンタメ作品ができると思うのだが・・・。

2018（平成30）年6月13日記



**Data**

監督：石井岳龍  
 脚本：宮藤官九郎  
 原作：町田康『パンク侍、斬られて候』（角川文庫刊）  
 出演：綾野剛／北川景子／染谷将太  
 東出昌大／浅野忠信／永瀬正敏／村上淳／若葉竜也  
 近藤公園／洪川清彦／國村隼／豊川悦司

■■■ショートコメント■■■

◆「原作：町田康×脚本：宮藤官九郎×監督：石井岳龍による宇宙的トライアングル」  
 「日本映画界に新次元の風穴をぶち開ける、前代未開のエンタテイメント誕生！」  
 「かつて誰も観たことのない超娯楽映画が誕生した。」

そんな過激な宣伝文句と個性的な衣装が目立つ、主演の綾野剛以下のオールスターの顔ぶれを見れば、こりゃ必見！そう思って劇場へ駆けつけたが・・・。

◆冒頭に登場するパンク侍こと掛十之進（綾野剛）の最初のセリフは侍風だったが、それはほんの一瞬だけ。その後は、すべての登場人物が侍言葉と現代言葉を同時に使う、いかにもクドカンこと宮藤官九郎の脚本らしい作り方だ。もちろん、それはそれでいい。また、黒和藩の藩主・黒和直仁（東出昌大）の側には、内藤帯刀（豊川悦司）率いる内藤派 vs 大浦主膳（國村隼）率いる大浦派の権力闘争があるという構図もしっかりしている。しかし、「腹ふり党」のイメージは、あまりにあまり・・・？

町田康の原作が「腹ふり党」の姿をどのように描いているかは知らないが、それをスクリーン上に表現するについて、石井岳龍監督はとんでもない演出をしたものだ。今の若者は、ホントにこれが面白いの・・・？

◆前半から中盤にかけては、それなりのストーリーがそれなりに興味深かったが、「腹ふり党」の元幹部・茶山半郎（浅野忠信）が登場し、クライマックスに向けて喋る大猿・大臼延珍（永瀬正敏）が登場してくると、話はハチャメチャ。まさにカオスの世界に入っていく。中国第5世代の巨匠、チャン・イーモウ監督の『グレートウォール』（17年）が、クライマックスではかなりバカバカしい、城の攻防を巡るスペクタクルになった（『シネマ40』52頁）のに対し、本作は「関ヶ原の合戦」のような（？）大規模野戦のスペクタクルになるが、そのバカバカしさは全く同じ。それを、バカになって楽しめればいいのだが・・・。

◆本作は、「パンク侍」というタイトルと黒和藩における派閥対立がストーリーの軸だから登場人物は当然男ばかり。本作の紅一点は茶山の側についている美女・ろん（北川景子）だけだが、私にはその存在そのものに違和感がある。浅野忠信や染谷将太、永瀬正敏たちのアホバカに徹した演技はそれなりにお見事だが、さすがに天下の美女、北川景子に腹ふり踊りをさせるわけにはいかないから、彼女の踊りだけは少し上品で、そこも違和感だが・・・。

しかして、この美女はストーリー展開上何のために登場させたの？そんな疑問がラストではなるほど、なるほどと説明されるが、これはちょっと無理筋では・・・？そんな本作を観ていると、クドカンの脚本の冴えもイマイチ・・・？

2018（平成30）年7月4日記



**Data**

監督・脚本・製作: 吉田喜重  
 出演: 岡田茉莉子/細川俊之/高橋悦史/楠侑子/八木昌子/稲野和子/松枝錦二/坂口芳貞/新橋耐子/高木武彦/伊井利子/原田大二郎/玉井碧/金内喜久夫/川辺久造/宮崎和命

■■■ショートコメント■■■

◆1967年4月から始まった大阪大学法学部での私の学生生活は、自分から学生運動に飛び込んだため、ピラ作り、アジ演説その他の「活動」が忙しかった。そのため、当時の刺激的な映画には関心が高かったが、映画館に行くことはほとんどできなかった。しかし、その時代には、ATG（日本アート・シアター・ギルド）の製作が始まり、大島渚、岡本喜八、吉田喜重等々による意欲作、話題作が次々と公開されていた。

167分の大作『エロス+虐殺』はその代表作の1つだが、残念ながら、リアルタイムでも修習生時代のビデオ録画でも観ていない。それを、今日はじめてシネ・ヌーヴォで開催中の「ATG大全集」で鑑賞。

◆去る5月22日に観た、瀬々敬久監督の『菊とギロチン』（18年）は、女相撲の女たちとアナキストの若者たちに焦点を当てた意欲作だった。また、3月15日に観た『朴烈（パクヨル）植民地からのアナキスト』（17年）は、そのタイトルどおり、韓国人のアナキストである朴烈とその愛人（内縁の妻）だった日本人の思想家、金子文子による「朴烈・文子事件」を描く刺激的な映画だった。

1923年9月1日に起きた関東大震災の混乱に乗じて、甘粕正彦憲兵隊大尉によって殺害された大杉栄はアナキスト（＝主義者）として有名だが、同時に自由恋愛主義の提唱者兼実践者としても有名だ。

◆しかして、本作には岡田茉莉子演ずるヒロインで、入籍しないまま家庭を持ち大杉の子供を5人も産んだ伊藤野枝の他、青鞥社の平賀哀鳥（稲野和子）と、女流記者の正岡逸子（楠侑子）が登場する。さらに、伊藤の忘れ形見だという魔子（岡田茉莉子）と、それを現在（1969年）の時点からインタビューする若い女性記者、東帯永子（伊井利子）が登場するから、かなり華やか（？）だ。歴史的事実としても大杉の愛情が野枝に移ったことを、才媛として知られていた東京日日新聞の記者、神近市子が嫉妬したことによって生



じた、日陰茶屋事件によって大杉は刺されて重傷を負ったが、さて彼が唱えていた自由恋愛主義とその実践はいかなるもの・・・？

◆本作の『エロス+虐殺』というタイトルは何とも刺激的。そして、その刺激的なタイトル通り、大杉栄（細川俊之）と、伊藤野枝らが生きた1923年という激動の時代の物語と、それから46年後の1969年の今、伊藤野枝の忘れ形見、魔子のインタビューを絡めた物語をクロスさせながらストーリーは進行していく。大杉栄は幸徳秋水亡き後、アナキスト集団を率いるリーダーと期待されたが、本作の「女狂いぶり」を見ていると・・・。

私は吉田喜重監督の映画を本作ではじめて鑑賞。同日、本作に続いて上映された『煉獄エロイカ』（69年）はパスしたが、来週末には『戒厳令』（73年）も鑑賞予定だ。これらの作品は、そのタイトルだけで問題提起性が十分理解できるし、その構成や内容も興味深い。もちろん、最近の出来の悪い日本人観客に迎合したような映画ではないから、何とも難解だが、とにかく見応え十分。なるほど、これだから、本作のような話題作は今でも満席に！

◆シネ・ヌーヴォは番号札に従って入場し、自由席で座るシステムになっている。“危険な暑さ”が続く中、午後2時過ぎに自転車で劇場に到着した私は、汗ビッシヨリになることがわかっていたため、引換券をもらった後トイレに入って下着一式を交換。顔も洗ってスッキリして席に座り本作を鑑賞したが、上映終了後、小銭入れに入れた自転車のカギを出そうとすると、アレレ、ズボンのポケットに小銭入れがない。こりゃ、トイレか通路か座席で落としたもの。きっと、誰かが受付に届けてくれているだろうと信じて申し出たが、届け出はなし。そこで再度リュックの中をはじめ、すべての荷物をチェックしたが、結局小銭入れは出てこなかった。自転車のカギを入れ、チケットとパンフレットを購入するため小銭入れからお金を出して支払い、ズボンのポケットに入れたのは確実だし、落としたとしてもその場所はトイレか通路か座席の下に限定されているはず。そして、シネ・ヌーヴォに本作を観に来ている映画好きのおじさん、おばさんなら、約5000円入っていた小銭入れを拾えば決してネコババせず、受付に届けてくれるはず。そう信じていたが、残念ながら・・・。

ちなみに、私の事務所で昨年12月28日に開催した忘年会に参加したある中国人の友人から、財布を忘れていなかったかと問い合わせがあった際、私は電車や駅で落としたとしても日本なら警察に届け出れば、届け出られる可能性が高い、と説明した。そして現に約1週間後に発見されたとの報告を聞いて、「やっぱり、日本はすごい国だろう」と自慢したものだ。それなのに、まさかシネ・ヌーヴォのような良質な映画館で、かつ、本作のような名作で満席となった時に、トイレ、通路、座席で紛失したこと確実な小銭入れが届け出されないとは・・・。日本人のおじさん、おばさんたちに対する私の“信用”は一気にガタ落ちに・・・。

2018（平成30）年7月26日記



**Data**

監督: 吉田喜重

出演: 三國連太郎/松村康世/三宅康夫/倉野章子/菅野忠彦/飯沼慧/内藤武敏/今福正雄/辻萬長/八木昌子

---



---



---



---



---



---

### ■ショートコメント■

◆シネ・ヌーヴォで開催されている「ATG大全集」で、『エロス+虐殺』(70年)に続いて吉田喜重監督の本作を鑑賞。1936(昭和11)年の「二・二六事件」は、私にとって大いに興味のある題材だが、その時の皇道派青年将校たちの理論的指導者であった北一輝とはどんな人物?また、彼が唱えた「日本改造法案大綱」とはどんな内容?

内田吐夢監督の『飢餓海峡』(65年)で観たものすごい演技が私の目に焼き付いている個性派で、演技派俳優の三國連太郎が北一輝を演じていることもあり、公開時に鑑賞できなかった私にとって本作は必見!ところが、『エロス+虐殺』の時は満席だったのに、なぜか本作の入りは少ない。これは一体なぜ?

◆『朴烈(パクヨル) 植民地からのアナキスト』(17年)でも、『菊とギロチン』(18年)でも、暗殺シーンは多いものの、成功する事例が少ないが目立っていた。ところが、本作冒頭では、安田財閥の当主、善次郎を朝日平吾(辻萬長)が短刀で見事に暗殺するシーンが登場する。これは昭和10年(1935年)の夏の終わりのことだが、暗殺後自決した平吾の遺書と血染めの衣を持って、その姉(八木昌子)が北一輝の屋敷に赴くところから本作のストーリーが始まっていく。北一輝と同じ立場で活動している西田税(菅野忠彦)が読む平吾の遺書には、北の「日本改造法案大綱」の影響がありありと・・・。

『戦争と人間』三部作(70年・71年・73年)『シネマ5』173頁)では、滝沢修扮する五代財閥の当主、五代由介のいかにも当主らしい泰然とした姿に対して、芦田伸介が演じた暴れん坊(?)の弟、五代蕃介の壮士然たる姿が印象的だったが、本作でも羽織袴姿で杖を持って歩く北一輝のいかにも壮士然とした姿が、三國の見事な演技力もあって良く似合っている。ところが、平吾の衣を持って三井財閥の下へ単身で乗り込み、一連の講釈を終えると、それを「ごもつとも」という表情で聞いていた財閥側は、北に対して「おみやげ」を。すると、その包みを「領収書代わりに・・・」と返還した北一輝の手元には、かなりの額の現金が渡っていたから、アレ・・・これって、当時の北は体の良い総会屋

のようなものだったの・・・？

◆北一輝は思想家、革命家として有名だし、何よりも『日本改造法案大綱』の著者として有名だが、同時に日蓮宗の熱狂的な信者としても有名。そのため、本作スクリーン上には、熱心に法華経を唱える姿が登場するが、本作ではそんな宗教的な素養と「日本改造法案大綱」の思想的 content についての説明が少ないのが残念。その代わり(?)として、本作では当時の下層軍人の典型と考えられる1人の兵士(三宅康夫)と、その妻(倉野章子)を登場させて、北と絡ませることによって、北の思想や、「五・一五事件」「二・二六事件」における北の立場をあぶり出そうとしている。当時、陸軍の皇道派青年将校たちの理論的支柱とされた「国家改造計画法案」をもとに、国家改造計画＝クーデター計画が着々と進められていたが、それに積極的に協力する西田に対して、北の立場は？

吉田監督が描く本作でのそこらの本筋の展開は少し難解だから、吉田美学はタツブリ堪能できるものの、そのストーリー展開はイマイチ・・・？

◆北から五・一五事件の情報をもらい、上官から「変電所を爆破せよ」との具体的任務を与えられながら、それを執行できず、妻と共に北の屋敷に逃げ込む兵士の姿を覗いていると、何とも痛ましい。口では天皇陛下のために殉国、捨身奉公を唱え、兵士として具体的に執行すべき任務も与えられながら、「できませんでした」と言って戻ってくるのは如何なもの・・・？

二・二六事件における青年将校の姿は高倉健と吉永小百合が共演した森谷司郎監督の『動乱』(80年)等で鮮明にされているが、本作後半に描かれる二・二六事件の姿は断片的にすぎるからその全体像はつかみづらい。それは、本作のテーマを五・一五事件から二・二六事件に向かう当時の日本の情勢下における北一輝の内心に当てたためだが、その成否は・・・？

屋敷の中にいながら、「二・二六事件」の“実況中継”を聞いていた北は、決起軍から「占拠を解く」と連絡を受けると、「それは絶対だめだ」と伝えるとともに、「司令官は真崎大将でいい」という本心を伝えたが、そこまで具体的に関与してくると、二・二六事件における北の立場は・・・？

◆本作ラストには、決起した青年将校たちが既に処刑されたことを聞いた直後の北自身の銃殺シーンが登場するが、それがいかにもあっけないのが残念。つまり、これだけあっけなく処刑されてしまったのでは、①青年将校たちは、なぜ昭和維新を叫んで二・二六事件に立ち上がり、重臣たちを暗殺したのか？②二・二六事件で北がいかなる理論的バックボーンになったのか？等が全然解明されないわけだ。もし、これが裁判闘争になっていけば、かなりの程度に二・二六事件の本質が明らかされたはずだが、当時はそれは不可能だったのは実に残念だ。

今年7月には麻原彰晃はじめ、死刑判決が確定していたオウム真理教の旧幹部たちの死刑が2度に渡って執行されたが、その後それでも真相究明が不十分だったことがさかんに

指摘されている。それに比べても、裁判によって二・二六事件の真相と北の思想がそれ  
いかなる影響を与えたのか等について、少しでも解明されていれば・・・？

2018（平成30）年7月31日記



**Data**

監督・撮影：木村大作  
 脚本：小泉堯史  
 原作：葉室麟『散り椿』（角川文庫刊）  
 出演：岡田准一／西島秀俊／黒木華  
 ／池松壮亮／麻生久美子／  
 緒形直人／新井浩文／柳楽  
 優弥／芳根京子／駿河太郎  
 ／渡辺大／石橋蓮司／富司  
 純子／奥田瑛二

■■■ショートコメント■■■

◆原作は『蛸ノ記』で直木賞を受賞した葉室麟の名作、『散り椿』。脚本は『雨あがる』の小泉堯史。監督・撮影は『劔岳 点の記』（08年）（『シネマ22』250頁）の木村大作。そして、主演は『永遠の0』（13年）（『シネマ31』132頁）、『蛸ノ記』（14年）（『シネマ33』未掲載）、『エヴェレスト 神々の山嶺（いただき）』（16年）（『シネマ37』86頁）、『海賊とよばれた男』（16年）（『シネマ39』68頁）、『追憶』（15年）（『シネマ39』206頁）、『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）等の岡田准一。そう聞けばこりゃ必見！

時代劇はカネがかかいるから、その企画製作は大変だが、時代劇の名作を絶やさないように作っていかねければ・・・。

◆藤沢周平の原作による時代劇『たそがれ清兵衛』（02年）（『シネマ2』68頁）や『隠し剣 鬼の爪』（04年）（『シネマ6』188頁）、『蟬しぐれ』（05年）（『シネマ8』200頁）、『武士の一分』（06年）（『シネマ14』318頁）、『山桜』（08年）（『シネマ19』394頁）、『花のあと』（09年）（『シネマ24』126頁）、『必死剣 鳥刺し』（10年）（『シネマ25』196頁）の舞台はいつも庄内の海坂藩だが、本作の舞台は扇野藩。冒頭の雪のシーンを観れば、それが雪国だということがわかるが、さてタイトルになっている「散り椿」とは？

これはパンフレットによると、正式名称は「五色八重散り椿」で、「花卉が一片一片散っていく。一木に白から紅まで様々に咲き分け艶やかである」とされている。しかし、今ドキこれを理解し、この風情を楽しむことができる日本人はHow many・・・？

◆冒頭、見事な剣の腕前を披露した瓜生新兵衛（岡田准一）は、それに続く導入部では妻、篠（麻生久美子）とのラブシーン（？）で、死んでいく妻への健気な気持ちを伝えた後、なぜか1人追放された扇野藩へ戻っていくことに。彼が身を寄せたのは、篠の妹、坂下里美（黒木華）と、弟、坂下藤吾（池松壮亮）が住む坂下家だが、瓜生が戻ってきたと聞いた扇野藩城代家老の石田玄蕃（奥田瑛二）は急警戒。

しかして、18年前に扇野藩の勘定方の不正を巡って起きた騒動とは？また、その時、「平山道場・四天王」と呼ばれた瓜生新兵衛、榊原采女（西島秀俊）、篠原三右衛門（緒形直人）、坂下源之進（駿河太郎）の立場と役割とは？

それは原作を読み、本作をじっくり観てもらいたいが、天下泰平と言われた徳川時代にも、有名な「伊達騒動」をはじめ、各藩ごとにさまざまなお家騒動があったわけだ。

◆本作のストーリーの骨格の1つは、城代家老として和紙問屋の田中屋惣兵衛（石橋蓮司）を活用することによって扇野藩の「財政再建」に辣腕をふるったものの、惣兵衛と共に私腹を肥やしていた石田玄蕃率いる石田派と、次期藩主（御世子）の政家（渡辺大）に忠義を尽くす御世子派との対立。18年前、四天王たちはことごとく御世子派についていたが、今、石田派に対抗しているのは、側用人に出世している榊原采女だけだ。そんな情勢下に新兵衛が戻ってくると、石田にとってはうっとうしい限り。その上、石田から起請文ももらっているものの、石田の権謀術数を心配する惣兵衛が、あろうことか新兵衛に“用心棒”を頼んだから、コトはややこしいことに……。石田にしてみれば、今や何とでもあの起請文を取り戻さなければ……。

そんな中、江戸にいた政家が扇野藩に戻ってくることが決まると、ついに石田派 v s 御世子派の対立はクライマックスに……。

◆本作のもう1つのストーリーは、篠を巡る新兵衛と采女との三角関係（？）。冒頭に見たとおり、篠は新兵衛の妻として死んでいったが、采女が扇野藩の側用人まで登りつめているのに対し、新兵衛は藩を追放されてしまったから、篠の幸せは薄かったの？また、篠はなぜ死ぬ際に「もう1度散り椿を見たい」という言葉の他、新兵衛に対して「采女を助けて欲しい」という言葉を残したの？

本作では、坂下家に戻ってきた新兵衛が篠の仏壇に手を合わせる風景が何度も登場する他、篠が新兵衛に残した手紙と、篠が采女に残した手紙の双方が、新兵衛と采女の2人の男の生き方にいかなる影響を与えたかが鮮明になっていくので、それに注目！もっとも、恋のせめぎ合いの結果として登場する2人の決闘シーンは、木村大作監督の撮影によって美しいシーンになっているが、“ある理由”によってその決闘は中途半端なままでも終わり、本来のあるべきクライマックスに向かっていくので、それに注目！

◆織田信長が1575年の「長篠の戦い」で、鉄砲を活用して武田軍の騎馬隊を撃破したのは有名な歴史的事実だが、天下泰平が続いた江戸時代の扇野藩で、鉄砲はどの程度実用化、実戦化されていたの？また弓矢は？

本作では政家が江戸から戻ってきた時、何者かに鉄砲で襲撃され、政家を守っていた平山道場・四天王の一人で、扇野藩の馬廻組頭をしていた篠原三右衛門（緒形直人）が死亡するシーンが登場する。さらに、本作ラストのクライマックスでは新兵衛と采女の2人が腹を決めて石田を討つべく歩み始めたとき、思いがけず2本の弓矢が放たれ、それが2本とも采女の胸に命中するシーンが登場する。いくら武芸に優れていても、見えない場所か

ら鉄砲や弓矢でやられたのでは対抗手段はないが、そんなシーンで主役や準主役が死んでしまっただけでは、殺陣を中心とする時代劇の美学は成立しなくなってしまう。したがって、時代劇の美学には飛び道具は邪道だが、新兵衛に命中しなかったのは幸いだ。その結果、本作ラストでは、遂に新兵衛が石田と切り結ぶことになるが、その結果は？そして、木村大監督の撮影によるその美学は？

◆これにて扇野藩の「お家騒動」は一件落着だが、新兵衛がそのまま扇野藩に残るわけにいかないのは当然。その結果、榊原采女も篠原三右衛門も死亡してしまった今、それまでは少し頼りないと思われていた坂下藤吾に扇野藩運営のウエイトがかかることに。しかし、藤吾は篠原三右衛門の娘である篠原美鈴（芳根京子）と結婚して篠原家の婿養子になるように政家から命じられ、坂下家と篠原家双方の継続のため「(子作りに) しっかり励め！」と命じられることに。まあ、扇野藩が平和になれば、きっとそれも可能に・・・。

2018（平成30）年8月7日記



**Data**

監督: 濱口竜介  
 脚本: 田中幸子、濱口隆介  
 原作: 柴崎友香『寝ても覚めても』  
 (河出書房新社刊)  
 出演: 東出昌大/唐田えりか/瀬戸  
 康史/山下リオ/伊藤沙莉  
 /渡辺大知/仲本工事/田  
 中美佐子

### ■ショートコメント■

◆キネマ旬報9月下旬号では10～29ページにわたって冒頭に大型特集を組み、また、“REVIEW 日本映画&外国映画”では3人の評論家がそろって星5つと異例の高評価をしているのが本作。そうなれば、こりゃ必見!と考えて映画館へ。

濱口竜介監督の『ハッピーアワー』第1部、第2部、第3部は素人(?)俳優による「アラフォー4人組」の日常を描いた5時間17分の「大作」だったが、『ハッピーアワー』というタイトルとは正反対のアラフォー4人組のドロドロした夫婦関係や男関係が面白く、DVD3枚組を一気に鑑賞し星5つをつけた(『シネマ37』117頁)。

◆本作はそんな濱口監督が第71回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門に初参加した作品だから、要注目。さらに、8月12日に観た『2重螺旋の恋人』(17年)は双子の兄弟に1人のヒロインが絡む、いかにもフランソワ・オゾン監督らしいサスペンス恋愛劇(?)だったが、本作では東出昌大が1人2役で麦(ばく)と亮平という“そっくりさん”を演じるらしい。そして、その恋人朝子を演じるのが、本作が本格的映画デビューとなる唐田えりか。予告編で観た限り透明感のある魅力的な女優さんだが、さて本番では・・・?

◆“濱口メソッド”と呼ばれる濱口監督の映画作りでは、素人俳優を起用した『ハッピーアワー』と同じような“ワークショップ”が行われたらしい。そのため本作では、若手ながら既に演技派俳優になりつつある東出に対してもそれが行われたから、彼はかなり面くらったらしい。なぜなら、そこで主として行われたのは、感情を入れず抑揚もイントネーションも付けず、すべての作為を排してただただ台詞を読む“本読み”だったからだ。そのため、彼は「頭でっかちな僕にとっては難しいものでした。」と語っている。



本作を観れば、最初に登場してくる麦のセリフ回しの抑揚の無さがよくわかるし、後半から登場してくる亮平も、それは同じだ。2015年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』で久坂玄瑞役を演じた東出は躍動感に満ちていたし、『聖の青春』（16年）での東出はセリフは少ないもののキリリとした棋士としてのたたずまいを見せていた。それに比べて、濱口演出を受けた本作における東出の魅力は・・・？

他方、今時こんな天然の女がホントにいるの？そう思ってしまう唐田も同じ濱口メソッドによるワークショップを経てスクリーン上に登場しているから、セリフ回しにおけるイントネーションのなさは東出と同じだ。これがすばらしいという人がいるのかもしれないが、私には如何なもの・・・？私は最初から、そのセリフ回しの奇妙さが目障りに・・・。

◆双子やそっくりさんの男2人に1人の女性が絡む恋愛モノはたくさんある。柴崎友香の『寝ても覚めても』を映画化するについて、濱口監督がどこまで原作を修正したのかは知らないが、麦との出会いと麦が消えた後の亮平との出会い、そして新たな恋の進展は、朝子の友人であるマヤ（山下リオ）や春代（伊藤沙莉）、そして亮平の仕事上の同僚である耕介（瀬戸康史）らの“応援団役割”もあって、それなりにまっとうに進んでいく。

しかし、それだけでは何の劇的展開もないから、本作ラストに向けては、今は人気モデルになってマスコミにもはやされている麦が再度登場してくることになる。そして、そこから本作のクライマックスに至るわけだが『2重螺旋の恋人』のクライマックスと同じように、その展開は如何なもの・・・？

◆キネ旬9月下旬号で、上野昂志は「日本映画では極めて稀な純粋恋愛映画」と題して本作を評論しているが、本作クライマックスにみる朝子の行動をそんな風に言っているの？もっとも、彼は「わたしが、本作を、純粋恋愛映画ではないか、それも日本映画ではきわめて稀な、と考えたのは、恋愛において朝子を縛るものは何もなく、彼女の行動を律するのは、ただ彼女の感情のみであるという点によってである。」とも書いているから、しっかり彼の真意を読み取る必要があるが、私には朝子の身勝手さが突出しているだけとしか思えない。そのため、思わず心の中で「そんなバカな！」とつぶやいているほどだったから、朝子にも本作にも全然共感できなかった。そのため、私の本作の評価は星3つがせいぜいだが・・・。

2018（平成30）年9月12日記